

改憲3分の2超 現実を見つめる

写真は毎日新聞7月12日夕刊「特集ワイド」。リードから—10日の参院選で、「憲法改正の国会発議に必要な3分の2議席の阻止」を主張した野党の防衛ラインはあっけなく超えた。有権者は今回の民主主義の分岐点にどう向き合い、何を選択しただろうか。時代の変化を洞察する作家3人に聞いた。落合恵子さん「違う声」どこまで拾えたのか、保坂正康さん「思想なきファシズム」前面に、平野啓一郎さん「愚かな時代」と言われぬよう。7月12日レポートに「7・10」をどう読むかと書いたが、共通するところも多い平野さんの発言から。



まず苦言を。今回の選挙、NHK ニュースをはじめテレビ報道がひどすぎた。この選挙の意味、重大さを十分報じなかった。

今の僕たちの日常や幸福を守るものが憲法です。その憲法について、改憲を掲げる自民党のある閣僚経験者が、安倍晋三首相が会長を務める議員連盟「創生『日本』」の会合で「国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の3原則はなくさない」と発言する動画が選挙前からインターネット上で流れた。この驚くべき動画、何十万人単位で見られているのにマスコミは報じない。新聞もそうです。

これは一例ですが、憲法の骨格を否定する人間もいる改憲勢力に、改憲発議ができる議席を与えるかが問われた選挙です。マスコミの言論の自由を保障するのも憲法なのに、なぜかくも問題意識が乏しいのか。不思議でなりません。

ただ、マスコミの問題を差し引いても参院選への無関心さは深刻です。社会がグローバル化して複雑になり、未来を決める変数が多くなり過ぎた。2次方程式なら何とか解けるけど、それ以上の複雑な方程式には向き合えない。それと同じで、政治も誰かに勝手に決めてもらいたい。その方が楽という人や、日々の生活に追われるばかりの人も多いでしょう。

18歳選挙権と言いますが、若者も大人も、憲法や政治がいかに日常生活に密着したものか、という視点や教育が欠けていた。そうした中でただ「投票しよう」と呼びかけてもダメです。教育のあり方から考えないと。

僕たちは無謀な戦争に突入していった戦前の日本について「当時の人は愚かだった」と捉えがちですが、憲法をどうするか、誰かが決めるのをぼんやり眺めていたら、30～40年後の世代に「あの時の日本人は愚かだった」と批判されます。僕たちは今、そうした時代に生きていることを自覚したい。

(2016年7月14日)